福岡県の離島観光に関する基礎的研究：宗像市大島を中心に

行平　真也

要旨

離島航路は離島の住民の日常生活や地域経済を支える必要不可欠な交通手段であることから、この確保・維持が極めて重要である。しかし、離島においては人口減少が著しい状況にあり、離島航路の輸送人員がここ20年で３割減少しており、航路運営事業者にとって厳しい経営環境にある。そのため、航路の維持のため、観光振興などにより交流人口の増加を図っていく必要がある。その施策を検討するにあたり、離島観光のニーズや現状を把握することが重要である。本研究では福岡県の離島、特に宗像市大島を対象とし、観光に関する意識調査を行った。

１．はじめに

離島航路は全国に283航路（2023年４月現在）あり、離島の住民の日常生活や地域経済を支える必要不可欠な交通手段であることから、この確保・維持が極めて重要である。しかし、離島は深刻な少子高齢化や島外への人口流出に伴う人口減少が著しい状況にある（図 1）。

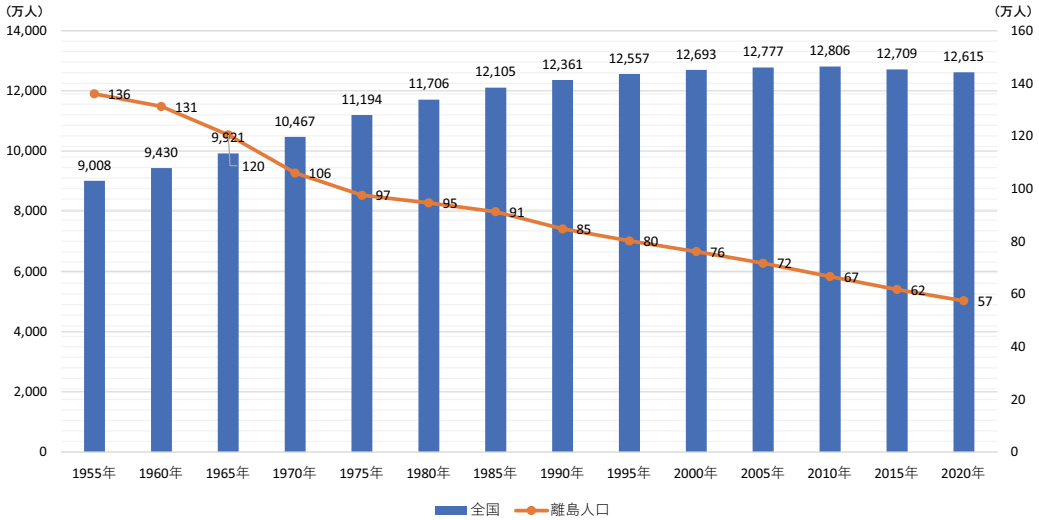

図１　日本全国及び離島の人口の推移
（公益財団法人日本離島センター（2023）2021離島統計年報より作成）

そのため、離島航路の輸送人員がここ20年で３割減少しており、航路運営事業者や地方公共団体にとって厳しい経営環境にあり、航路の維持が困難な状況になっている（海事レポート(2023)）。輸送人員の減少による市場規模の縮小については古くから指摘されており、例えば、松本（2002）は「近い将来航路の市場規模拡大は観光産業などによる交流人口の増加以外にはその可能性は極めて小さい」と述べている。そのため、航路の確保・維持のため、多くの離島では輸送人員の減少を補うために、観光振興などに取り組むなど交流人口の増加を図ってきた。

しかし、新型コロナウイルス感染症により、ステイホームや不要不急の外出自粛が呼びかけられるなど、人の移動が大きく制限されたことから、離島ではその医療体制の脆弱さなどから、感染拡大当初から来島自粛要請の呼びかけを行う島が多くみられた。2020年４月26日付の日本経済新聞朝刊では「離島に来ないで」というショッキングな見出しの記事が掲載され、離島の住民が危機感をもって、新型コロナウイルス感染症を警戒している様子が示された。このような中、輸送人員はさらなる減少となり、コロナ前の2019年度において国庫補助航路126航路の旅客輸送実績が862.0万人だったのに対し、コロナ禍である2020年度は657.3万人と前年比の23.7%減となり、離島航路の経営に追い打ちをかける状況となった。

上記のとおり、厳しい状況にあるが、新型コロナウイルス感染症の影響が収まった後のアフターコロナ[1)]においては改めて交流人口の増加を図っていく必要があると考えられる。

交流人口を増加させる施策を検討するにあたり、離島観光のニーズや現状を把握することが重要であり、例えば、財団法人東京市町村自治調査会（2012）は東京都の島しょ地域のイメージを明らかにするために伊豆大島、神津島のイメージなどについて意識調査を実施している。また、離島観光マーケティング戦略事業共同企業体（2016）は沖縄県の離島の認知率や来訪経験、イメージについての調査を行っている。さらに沖縄振興開発金融公庫（2017）は沖縄の離島観光に関する意識調査として、各離島の認知度や旅行経験などを整理している。

このような事例はみられるが、筆者の知る範囲において、福岡県の離島を対象としたものはみられない。そこで、本研究では福岡県の離島、特に宗像市大島を対象とし、観光振興の取り組みを行う施策を検討するための基礎的な知見を得ることを目的に、観光に関する意識調査を行った。

２．福岡県宗像市大島について

宗像市大島は宗像市神湊の北西約6.5kmの沖合に位置し、筑前諸島に属する離島である（図２）。面積は7.17km^{2}で、集落は島の南側の平坦地に集中している。豊かな自然に加え、2017年に世界文化遺産として登録された「『神宿る島』宗像・沖ノ島と関連遺産群」の構成資産である宗像大社中津宮、宗像大社沖津宮遙拝所があり、貴重な歴史的遺産が存在している。

人口は年々減少し続けており、宗像市によれば2023年８月末現在559人、高齢化率は48.5%である。

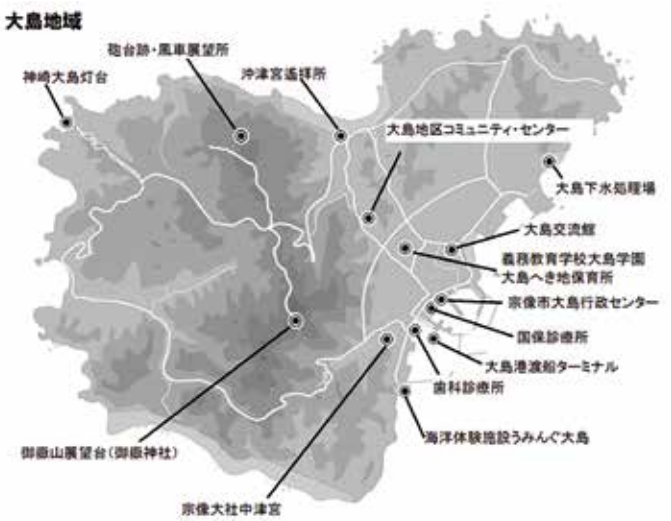

図２　宗像市大島の概況図
（宗像市離島振興計画（令和５年度～令和14年度）（2023）から引用）

３．調査方法

調査方法は質問紙法を用いた。調査項目は財団法人九州運輸振興センター（2000）が行った奄美大島を対象とした調査や財団法人東京市町村自治調査会（2012）が行った伊豆大島、小笠原諸島を対象とした調査、沖縄振興開発金融公庫（2017）が行った沖縄県の離島観光に関する意識調査における項目を参考に作成した。

2023年２月に株式会社マクロミルが運営するセルフ型アンケートシステムQuestantを利用して、Japan Cloud Panelに登録されている福岡県在住のモニターを対象にデータ収集を行ない、1,101名の回答を得た。1,101名のうち福岡県に属さない自治体名を記載していた１名を除外し、1,100名の回答を有効回答とした。

４．結果と考察

回答者の属性について表１に示した。居住地域については市町村から北九州地域、福岡地域、筑後地域及び筑豊地域の４地域に分類した。

４．１　宗像市大島の観光について

４．１．１　宗像市大島への旅行経験について

宗像市大島への旅行経験について年代別の結果を表２に示した。全体では「行ったことがある」が15.0%、「知っているが、行ったことはない」が55.4%、「知らないし、行ったこともない」が29.6%であった。年代別では70歳以上において「行ったことがある」の割合が23.8%と高く、40歳代から60歳代については15%程度であった。

表１　対象者の属性

項目		回答数	割合
性別	男性	648	58.9%
	女性	452	41.1%
年代	10歳代	8	0.7%
	20歳代	57	5.2%
	30歳代	138	12.5%
	40歳代	254	23.1%
	50歳代	313	28.5%
	60歳代	208	18.9%
	70歳以上	122	11.1%
居住地域	北九州地域	262	23.8%
	福岡地域	668	60.7%
	筑後地域	102	9.3%
	筑豊地域	68	6.2%

表２　年代別の宗像市大島への旅行経験（n=1,100）

年代	行ったことがある		知っているが、行ったことはない		知らないし、行ったこともない		全体	
	回答数	割合	回答数	割合	回答数	割合	回答数	割合
10歳代	0	0.0%	4	50.0%	4	50.0%	8	100.0%
20歳代	4	7.0%	24	42.1%	29	50.9%	57	100.0%
30歳代	13	9.4%	67	48.6%	58	42.0%	138	100.0%
40歳代	40	15.7%	127	50.0%	87	34.3%	254	100.0%
50歳代	45	14.4%	191	61.0%	77	24.6%	313	100.0%
60歳代	34	16.3%	124	59.6%	50	24.0%	208	100.0%
70歳以上	29	23.8%	72	59.0%	21	17.2%	122	100.0%
合計	165	15.0%	609	55.4%	326	29.6%	1,100	100.0%

次に、「行ったことがある」とした回答者を対象に、訪れた回数を問うたところ、１回が63.0%と最も多く、２回が24.2%であった。また、主な訪問目的を問うたところ、「観光・レジャー」が82.4%と最も多く、次いで「商用・仕事」は8.5%であり、ほとんどの回答者が「観光・レジャー」を目的として宗像市大島を訪れていた。

４．１．２　訪れたことがある宗像市大島の観光スポットについて

訪れたことがある宗像市大島の観光スポットについて、公益財団法人日本離島センター(2017) が発行するSIMADASに掲載されているスポットを項目として問うた。全体とともに、観光・レジャーを主な目的とした回答者について整理した結果を図３に示した。

「宗像大社中津宮」が最も多く、回答者の半数以上が訪れたことがあると回答していた。次いで「大島灯台」、「沖津宮遙拝所」、「砲台跡」、「海水浴場」と続いた。

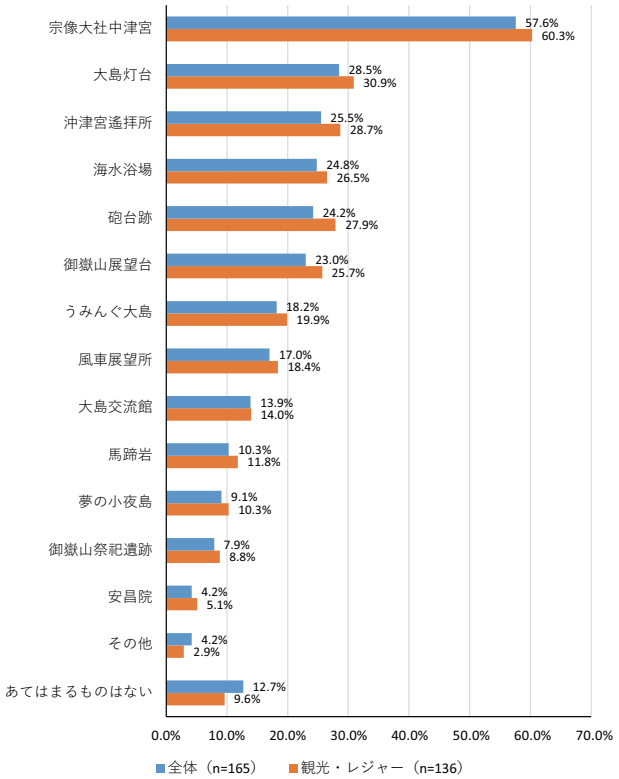

図３　訪れたことがある宗像市大島の観光スポット

４．１．３　知っている宗像市大島の観光スポットについて

知っている宗像市大島の観光スポットについて、４．１．２訪れたことがある宗像市大島の観光スポットと同様の項目により問うた。宗像市大島に「行ったことがある」とした回答者と「知っているが、行ったことはない」とした回答者の結果を図４に示した。「宗像大社中津宮」が最も多く、「海水浴場」、「大島灯台」と続いた。

「大島灯台」、「うみんぐ大島」、「沖津宮遙拝所」、「砲台跡」、「風車展望所」については「行ったことがある」とした回答者と「知っているが、行ったことはない」の間で20%以上差があり、宗像市大島を認知しているが、行ったことがない回答者の認知度が低いことが示唆された。

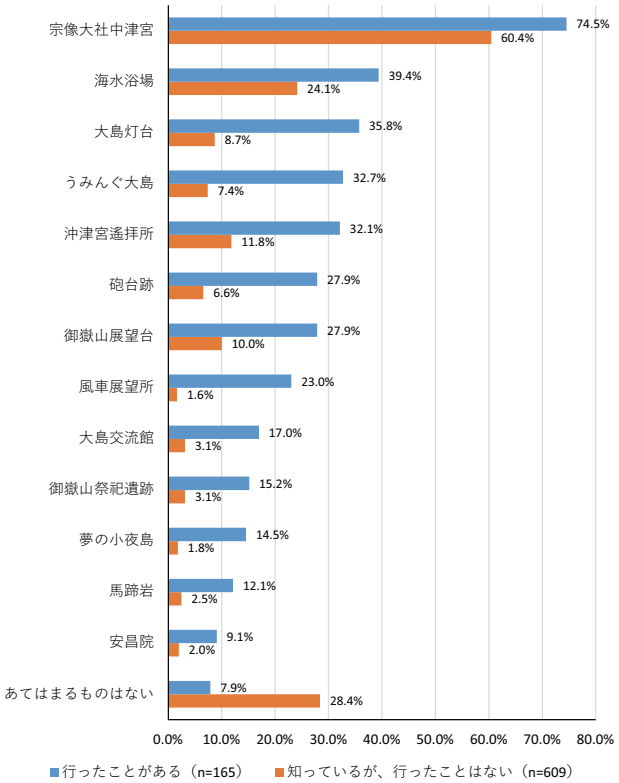

図４　知っている大島の観光スポットについて

４．１．４　宗像市大島のイメージ

宗像市大島のイメージについて、回答結果を図５に示した。「自然が豊富な島」が「行ったことがある」とした回答者と「知っているが、行ったことはない」とした回答者のどちらにおいても最も多かった。「行ったことがある」とした回答者については「のんびりした島」、「釣りが楽しめる島」と続いたが、「知っているが、行ったことはない」とした回答者では「数多くの歴史的文化遺産を有する島」が次いで多かった。

「数多くの歴史的文化遺産を有する島」についてはどちらも同じ程度の割合であったが、「のんびりした島」、「釣りが楽しめる島」の２つについて「行ったことがある」とした回答者と「知っているが行ったことはない」の間で20%以上の差があり、この２つは宗像市大島を訪れて得られるイメージではないかと考えられる。

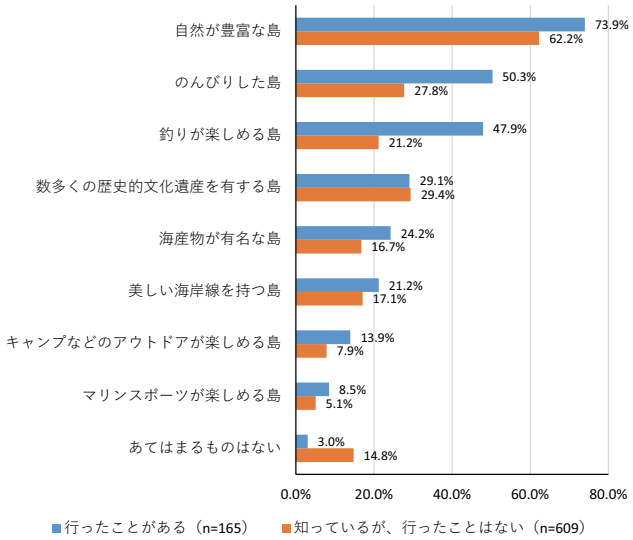

図５　宗像市大島のイメージ

４．１．５　宗像市大島への旅行意向

宗像市大島への旅行意向について、４．１．１において「知っているが、行ったことはない」と回答した609名の回答結果を表３に示した。「行ってみたいと思う」が22.2%、「やや行ってみたいと思う」が35.8%であり、合わせて58.0%と半数以上の回答者が「行ってみたい」、もしくは「やや行ってみたい」としており、宗像市大島への旅行意向が高いことが示された。

表３　「知っているが、行ったことはない」とした回答者の宗像市大島への旅行意向（n=609）

年代	行ってみたいと思う		やや行ってみたいと思う		どちらでもない		あまり行ってみたいと思わない		行ってみたいと思わない		わからない		全体	
	回答数	割合	回答数	割合	回答数	割合	回答数	割合	回答数	割合	回答数	割合	回答数	割合
10歳代	0	0.0%	3	75.0%	1	25.0%	0	0.0%	0	0%	0	0%	4	100%
20歳代	6	25.0%	10	41.7%	3	12.5%	2	8.3%	1	4%	2	8%	24	100%
30歳代	20	29.9%	18	26.9%	15	22.4%	3	4.5%	6	9%	5	7%	67	100%
40歳代	22	17.3%	50	39.4%	33	26.0%	8	6.3%	9	7%	5	4%	127	100%
50歳代	38	19.9%	67	35.1%	56	29.3%	16	8.4%	7	4%	7	4%	191	100%
60歳代	26	21.0%	50	40.3%	27	21.8%	13	10.5%	8	6%	0	0%	124	100%
70歳以上	23	31.9%	20	27.8%	19	26.4%	5	6.9%	4	6%	1	1%	72	100%
合計	135	22.2%	218	35.8%	154	25.3%	47	7.7%	35	6%	20	3%	609	100%

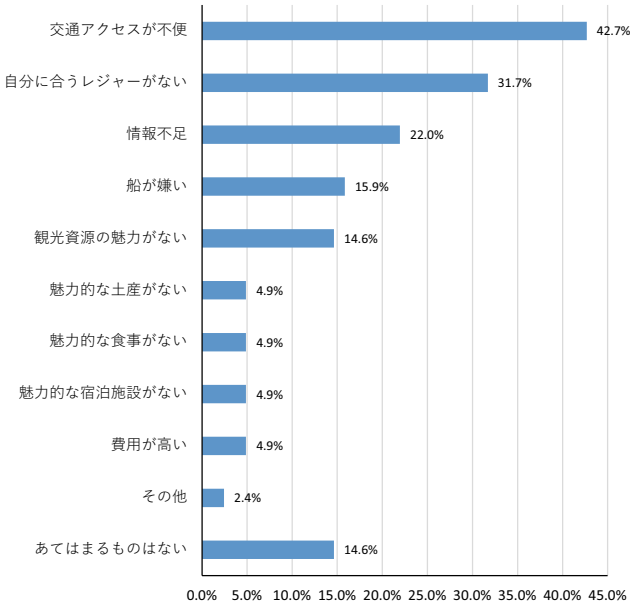

図６　宗像市大島への旅行を希望しない理由（n=82）

４．１．６　宗像市大島への旅行を希望しない理由

４．１．５の宗像市大島への旅行意向において「あまり行ってみたいと思わない」、「行ってみたいと思わない」と回答した計82名を対象に宗像市大島への旅行を希望しない理由について問うた結果を図６に示した。「交通アクセスが不便」が42.7%で最も多く、次いで「自分に合うレジャーがない」が31.7%、「情報不足」が22.0%であった。財団法人東京市町村自治調査会（2012）の行った調査結果における伊豆大島への旅行を希望しない理由についても「交通アクセスが不便」が32.1%と最も多く、同様の結果であった。

４．２　福岡県内の離島の認知度との比較

宗像市大島の認知度について、福岡県内の他の離島と比較を行った。調査対象とした福岡県内の離島は、離島振興法第２条において離島振興対策実施地域として指定された筑前諸島地域の属する８つの有人離島（宗像市大島を含む）に能古島（福岡市）を加えた９島とした。

対象とした離島についてそれぞれ「行ったことがある」、「知っているが行ったことがない」、「知らないし、行ったことがない」の 3 項目で問うた。「行ったことがある」と「知っているが行ったことがない」と回答した場合に認知しているとした。なお、宗像市大島については4.1.1で結果を示したとおりである。

離島ごとの認知度の結果について図 7 に示した。能古島が90.8%と最も高く、次いで玄界島（77.7%）、大島（70.4%）と続いた。次に旅行経験について図 8 に示した。能古島が54.4%と半数を超えていたが、他の離島については 2 割未満と低く、能古島以外の離島についてはほとんど訪れていないことが示された。

離島の認知度と旅行経験について図 9 に示す。旅行経験は能古島が高く、他の島と傾向が異なっていた。玄界島と大島の認知度は 7 割を超えていたが、旅行経験が玄界島では12.2%、大島では15.0%と少なかった。

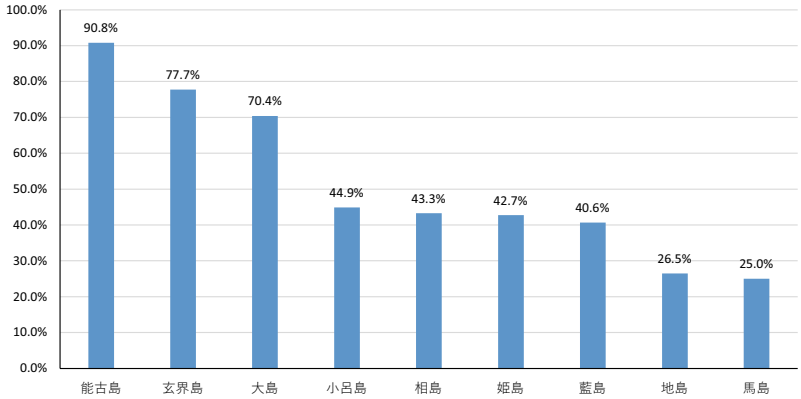

図 7　福岡県内の離島の認知度（n=1,100）

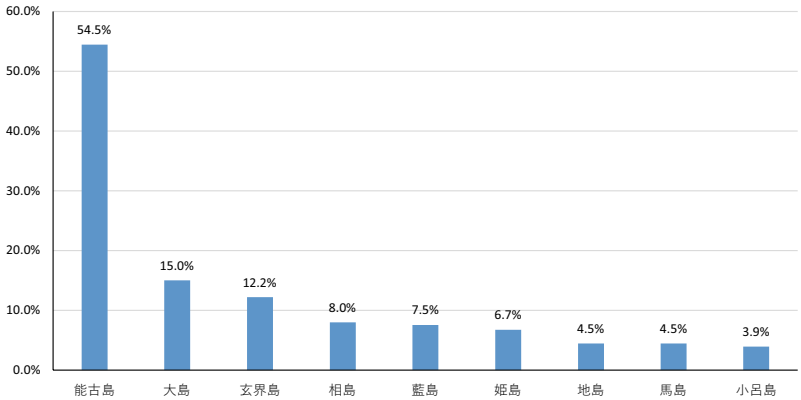

図 8　福岡県内の離島への旅行経験（n=1,100）

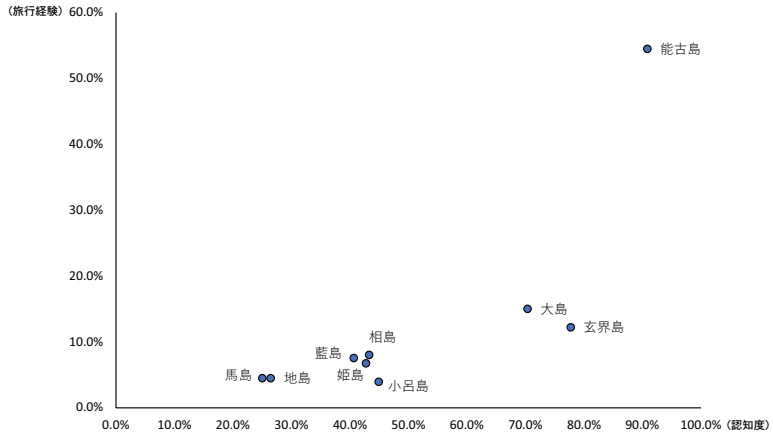

図９　福岡県内の離島の認知度と旅行経験（n=1,100）

認知度と旅行経験についてグループ化をすると、第１グループ（能古島）は認知度、旅行経験ともに高い島、第２グループ（玄界島、大島）は認知度は高いが旅行経験が少ない島、第３グループ（小呂島、相島、藍島、姫島）は認知度が40%代であり、旅行経験が１割未満の島、第４グループ（地島、馬島）は認知度、旅行経験ともに低い島と分けられた。

これらの結果から宗像市大島は認知度は高いが、旅行経験が少ない島と位置付けられることが明らかになった。

５．おわりに

離島航路の厳しい状況については冒頭で述べたが、宗像市大島においても新型コロナウイルス感染症の影響は大きく、宗像市の本土側である神湊港と大島を結ぶ大島航路の利用者数はコロナ前の2019年度は228,394人であったが、2020年度には156,781人と31.4%減となり、大変厳しい状況にあった。新型コロナウイルス感染症を取り巻く状況の変化や様々な取り組みの成果により、利用者数は回復傾向にあるが、2020年度から2023年度の利用者数はいずれもコロナ前の2019年度を下回っているのが現状である。新型コロナウイルス感染症が2023年５月８日に５類感染症に位置付けられ、コロナ前の日常が戻りつつある現在においては引き続き、交流人口を増やす取り組みが重要であると言える。

本研究では、その取り組みに資するために宗像市大島を対象に観光に関する意識調査を行い、旅行経験や訪れたことがある観光スポット、知っている観光スポット、イメージについて整理した。特に福岡県内の離島の認知度について整理した結果、宗像市大島は認知度は高いが、旅行経験が少ない島と位置付けられることが明らかになった。認知しているが旅行経験がない回答者を対象とした旅行意向において「行ってみたいと思う」と「やや行ってみたいと思う」とした回答者が合わせて58.0%であったことから、その旅行意向は高く、来たことがない方に来て頂くためのPRを行うことが必要であると思われる。それに対し、どのように取り組んでいくかについては今後の課題としたい。

謝辞

本研究は九州産業大学産業経営研究所令和４年度専門研究部プロジェクトの助成によるものである。まず助成を頂いた九州産業大学産業経営研究所に深く感謝を申し上げる。次に、宗像市大島に関する資料提供を頂いた宗像市元気な島づくり課の方々、文献を提供頂いた沖縄振興開発金融公庫の方々に感謝を申し上げる。また、共同研究者として離島観光の調査に同行していただいた当時、九州産業大学地域共創学部観光学科の准教授であった豊島茂氏にお礼申し上げる。

注

１）研究当時において新型コロナウイルス感染症は新型インフルエンザ等感染症（いわゆる2類相当）に位置付けられていた。

参考文献

公益財団法人日本離島センター（2019）『新版日本の島ガイドSHIMADAS（シマダス）』，p.889-892
公益財団法人日本離島センター（2023）『2021離島統計年報』
国土交通省海事局（2023）『海事レポート2023』
松本勇（2002）「需要調整の廃止と離島航路への競争事業者の参入」『長崎県立大学論集』36-3，pp.1-57
宗像市（2023）『宗像市離島振興計画（令和５年度～令和14年度）』
沖縄振興開発金融公庫（2017）「沖縄の離島観光に関する意識調査報告」，『公庫レポート』，No.150，pp.23-41
離島観光マーケティング戦略事業共同企業体（2016）『平成27年度離島観光活性化促進事業「離島観光マーケティング戦略事業」委託業務報告書』
財団法人九州運輸振興センター（2000）『奄美大島群島の海上交通ネットワークシステムの確立に関する調査研究―報告書―』，https://nippon.zaidan.info/seikabutsu/2000/00175/mokuji.htm
財団法人東京市町村自治調査会（2012）『島しょ地域における観光ニーズに関する現況調査』